



DRAMA かながわ No.95

Theater Association of Kanagawa September 2025

TAK in KAAT 「Blue moment」-世界が夜と朝の狭間で色づく瞬間-
令和7年度 神奈川県演劇フェスティバル／After School Theatre／
劇団探訪 虚空環幻想レーゲンハイト、劇団まきじゃく／
資料室だより ほか



TAK in KAAT

『Blue moment』-世界が夜と朝の狭間で色づく瞬間-

2025年5月29日(木)~6月1日(日) KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ



【総評】木之枝棒太郎（Theater Company 夜明け）

今回、TAK in KAATでTheater Company 夜明けが上演させていた「Blue moment」は、1年前から企画していた作品が諸般の事情により上演できなくなり、新たに僕自身が初となる長編作品の脚本執筆に挑戦するところからスタートしました。

公演まで残された時間は1ヶ月半。今から書けるものは、自分自身の人生しかない。そう考え、自分の人生史を書きなぐったプロットを作りました。そのプロットから、音楽を担当してくれた鈴木清人氏がまず美しい旋律を生み出してくれました。その曲を聴き、相乗効果でさらにインスピレーションが溢れ出し、この作品を最後まで書き切ることができました。

まずは、2時間のこの台本を短期間で完本できたことに安心しましたが、一方で本当にこの短い時間でKAATでの公演を成功させられるのか、不安もありました。それでも、とにかく力を貸してくれる仲間たちと共に、毎日全力で走り抜けた1ヶ月でした。

この舞台には、2台の本物のバイクが登場します。高校2年生の時から演劇を始めた僕は、同じ高校2年生の頃に乗り始めたアメリカンバイクがありました。昨年、色々あって手放してしまいましたが、芝居歴と同じ18年間で共に過ごした相棒でした。「いつか本物のアメリカンバイクを舞台の上に出したい」という長年の想いを、今回KAATという素晴らしい劇場で、しかもKAATだからこそ叶えることができたことは、個人的に感無量です。

鈴木氏はこの公演のために「夜明けの唄」「光への祈り」「夜明けの唄りプライズ」の3曲を書き下ろしてくれました。芝居に加えた歌の力と、本物のバイクを使ったことで、疾走感のある群像劇になりました。

今回のTAK in KAATは、これからのTheater Company 夜明けの世界観と意志をはっきり示せる公演になったと思います。「生」と「死」、そして新たな「生」へ向かうこと。「朝」と「夜」、そしてまた訪れる「朝」。その夜明け前のわずかな時間だけ現れる美しい瞬間をテーマにしました。

物語は、「Blue」というこの世界に生まれてこられなかった少年と、「K」というこの世界からいなくなる一人の男が、バイクで星空の河を渡って行くというものです。人生の走馬灯を巡る中で、実話を扱うことによるドキュメンタリー的要素と、自分が伝えたいジャーナリズムを、2時間にぎゅっと詰め込みました。また「風」と「秘密」という言葉もキーワードでした。「風の噂」「世間の風」「社会の風潮」……。「秘密」というものは風に弱

い。だから現代人は、風の吹かない場所へ行きたがる。閉じこもり、奥底にしまい、やがて忘れてしまう。今回の公演は、そのしまい込んでいたもの、忘れていたものを思い出す、良い旅になりました。



この旅に付き合ってくれたキャストのみんなには、本当に感謝の気持ちしかありません。出演者は、劇団四季出身や新国立劇場、帝劇、日生劇場など商業舞台で活躍するベテラン陣から、新国立劇場演劇研修所修了生や桐朋学園芸術短期大学卒業の若手まで、多種多様な14名の俳優がオーディションやオファーを経て集まってくれました。そこに、昨年からTC夜明けの舞台表現WSに参加してくれた2名の学生を加え、総勢16名の個性的なメンバーで最後まで駆け抜けることができました。

集客は600人以上に達し、多くの方々にこの作品を見ていただきました。劇団としても、この公演を通じて劇団員が4名増え、企画として成功を収めることができたと思っています。未来への可能性と手応えを感じる公演となりました。

今回のTAK in KAATをらせていただき、多くの協力と応援をくださった神奈川県演劇連盟の皆様、会場に足を運んでくださったお客様、最後まで力を貸してくれた出演者・スタッフ・劇団員の皆様に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

Theater Company 夜明けは、2025年12月25日(木)~27日(土)にShort Story Stage vol.2「Eve II」を大倉山記念館ホールにて上演予定です。物語が続く限り、夜は明け、光が差していきます。これからも私たちは、美しい夜明けの瞬間を描き続けます。どうか、これからも見守っていただければ幸いです。



参加者の声

Blue momentにご来場くださった皆さま、誠にありがとうございます。今回の舞台は私の中で初挑戦が多く、とても楽しい刺激的な日々でした。

象徴的なバイクの演出では、移動や回転を担う裏方の労力が大きく、乗る側もジャンプして降りたり、バイクの上に直立するなど難しい動きを求められました。私も乗り越えに挑戦し、大変さも含め初めての経験で心から楽しかったです。少しでも登場するダンスシーンも初挑戦で新鮮でした。

また劇中には合唱シーンがあり、楽曲提供者のこだわりでオープニングとエンディングを改変してくださったり、歌唱指導の方が丁寧に指導してくださったおかげで、美しいハーモニーが生まれ、難しいアルトも歌い切ることができました。

約1か月という短い稽古期間を最後まで走りきることができたのは、様々な方の支えや、演出の木之枝さんの導きがあったおかげだと思います。稽古場も笑いの絶えない現場で、未だに恋しくなるほど素敵なメンバーに恵まれていました。濃くて忙しかった日々は、まさに青春で、限られた時間とピンチの連続が、かえって絆を深めてくれたように思います。

最高の場所で、最高のメンバーと、最高の景色を見られて幸せでした。またKAATに立てる日を夢見て、私も頑張りたいと思います。

文：加藤歩 (Theater Company 夜明け)



劇評

TAK in KAAT

『Blue moment』

—世界が夜と朝の狭間で色づく瞬間—

KAATの大スタジオは200席で、箱としては決して大きくはないが客席と舞台との距離感、舞台空間の広がり、そして照明と音響のダイナミックなバランス等々、どれを見てもプロシステムそのものである。なので、作品はもちろん、演出・役者陣とも器に負けない緻密なつくり込みが求められる。特にパワー／エネルギーとスピードである。それが弱いと舞台空間、客席を満たす芝居にならない。若い役者たちが圧倒的に多いこのカンパニーは、しかし、そのエネルギーを存分に発揮していたと思う。

さて、舞台である。今回の芝居は、カンパニーを主宰し、作・演出さらには役者としても参画している「棒ちゃん」こと木之枝棒太郎ならではの真っ直ぐな作品であった。芝居のタイトルの中にある「Blue moment」とは、夜の闇が明けて朝の輝きが始まる一瞬前に見ることが出来る真っ青な空のことだという。パンフレットにもある「世界が夜と朝の狭間で色づく瞬間」、まさに劇団名につながるタイトルである。芝居に情熱をぶつけ、ひたすらに走っている彼ら劇団員の生きざまにもつながる。筆者は棒ちゃんとは、これまでTAKの合同公演を筆頭に、前回のTAK in KAATでわが劇団が挑戦した昨年8月の舞台で客演をお願いするなど縁が深い。そんな心理的背景もあって、芝居が始まってほどなくこれは棒ちゃんの自伝的作品なのかもしれないと感じたのは、あながち的外れではないだろう。主人公の若き役者が所帯を持ってほどなく子宝に恵まれ、「もう可愛くて・・・」とメロメロな感じが彼の日頃の家族への想いに重なっていると感じたのは、筆者だけではないかも。とすると、筋立ての始まりとなる幼少から少年期にかけてのエピソードも棒ちゃんのそれで、あ～そんな少年だったの？と想いを巡らせながら舞台の流れを追っていた気がする。ところで芝居の流れの作り方として、かつては○幕○場という時系列の

構成、それに関連する場面転換があって、それにとらわれない演劇スタイルは一幕ものなどという言い方があった。たぶんそういう古典的な劇構成は今後なくなっていくのだろう。舞台上での時間の流れやリズムがどんどん早くなっていく。映画画的になっていくと言えるかもしれない。今回の作品も2時間で休憩がないと言われ、ちと心配もしたがそれは杞憂だった。心地よいスピード感で集中が途切れることはなかった。

舞台空間の設計、プランニングと照明の素晴らしさにも触れておこう。KAATでは丈夫なアルミフレームを土台とする様々なサイズのパネルを組み合わせることで舞台設計をすることが多い。今回もセンター奥に3～4メートルほどの高さでメインステージを組み、そこから左右に腕を拡げるように舞台ツラに向かって高さを変えながら階段状のサブステージを設けた。ステージセンター奥から、手前に向かってスペースが拡がる。ここに大型のバイクが芝居の進行に応じて効果的に登場するのだ。程よい省略と遊びのバランスがいい。バイクがかっこよくて、これでブルーモーメントの薄明りの中、例えば湘南の海岸沿いをゆるゆる転がしたらいいかも、なんて想像力をくすぐってくれた。

芝居全体としては、スピーディなセリフと明かりの組み合わせで、リズムカルに展開し、ところどころに登場するバイクがゆったりと気分を切り替えてくれる。昨年12月の大倉山でのメルヘンチックな舞台もよかったが、Theater Company 夜明けの作品の魅力は、空間の活かし方、ストーリーテリングを支える役者たちのセリフの確かさがもたらす心地よいバランス感だ。今回の舞台でもそれを強く感じた。彼らの舞台は、これからも目が離せないだろう。

文：吉浜直樹 (劇団横濱にゅうくりあ)



令和7年度 神奈川県演劇フェスティバル



神奈川県演劇フェスティバルは、神奈川県演劇連盟が主催する演劇の祭典です。地域に根ざした劇団による作品から、若手による挑戦的な舞台、プロフェッショナルによる本格的な公演まで、毎年幅広い演目が神奈川県内各地の劇場で上演されます。

スローガン「演劇が日常となる神奈川を」には、演劇が特別なものではなく、日々の暮らしの中に自然と息づく文化であってほしいという願いが込められています。観る人、演じる人、支える人—すべての人が演劇を通じてつながる場を目指しています。

今年度は6団体が参加。神奈川の街に演劇の灯を。あなたの日常に演劇のひとつときを。ぜひ、会場まで足をお運びください。

(※現時点で終了している公演もございます)

■劇団年輪

第66回公演「ShareHouse'50」

【日時】2025年8月3日(金)14:30

【会場】戸塚公会堂

■theater 045 syndicate

TAK in KAAT「夏の夜の夢」

【日時】2025年8月21日(木)19:00、22日(金)14:00/19:00、
23日(土)14:00/19:00、24日(日)14:00

【会場】KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ

■演劇プロデュース『螺旋階段』

第38回公演「妄想コピー／river」

【日時】2025年10月24日(金)19:00、25日(土)13:00/18:00、
26日(日)13:00

【会場】小田原市国府津海岸 BLENDPARK

■劇団横濱にゅうくりあ

本公演「ヨコハマの街に永遠が流れている」

【日時】2025年11月15日(土)13:30/17:00、16日(日)13:30/17:00

【会場】STスポット横浜

■劇団河童座

第243回公演「これでいいのか! Vol.2」

【日時】2025年12月6日(土)13:30/18:30、7日(日)13:30

【会場】横須賀市立青少年会館3Fホール

■Theater Company 夜明け

Short Story Stage vol.2「EveⅡ」

【日時】2025年12月25日(木)19:30、26日(金)13:30/16:30/19:30、
27日(土)13:30/16:30

【会場】大倉山記念館ホール



劇団年輪「Share House '50」

2025年8月3日(金) 戸塚公会堂

劇評

会場となった戸塚公会堂は2024年6月にリニューアルされ、設備・安全性・快適性が大幅に向上していると感じました。天井には埋め込み型LEDの照明もあり、ステージは広くプロセニウム形式で舞台との距離感も良いです。客席には手すりが設けられ、施設内には多目的トイレやオストメイト対応設備や車椅子の貸出など、バリアフリー環境も整えられていました。まさに演劇を行うのにふさわしい舞台空間だと感じました。

物語は、夢を追う若者たちが暮らすシェアハウスに、未来から来たアンドロイド「ミライ」が現れるところから始まります。人間の「心」を学ぶために現代に送り込まれた彼女は、住人たちとの交流を通して優しさや葛藤、夢に触れていきます。一方で土地問題や家族の秘密といった、現実的な課題も浮かび上がってきます(以上、パンフレットから引用したあらすじ)。

役者ひとりひとりが描き出すキャラクターはいずれも個性が際立っており、自然と感情移入できるものでした。引きこもりがちだった桜子が徐々に明るく変わっていく姿、凄みや睨みをきかせようとしつつもどこか憎めない地上げ屋グループ、若者に囲まれながらも違和感なく馴染み、彼らに負けない志の高さを持っていた蒼船さんなど、どのキャラクターも魅力的で丁寧に描かれていました。また、ミライの衣装と髪型も印象的でした。近未来的な雰囲気を持ちつつも現代の舞台にうまく溶け込み、違和感なく観る者を物語の世界に引き込んでいました。

シェアハウスの人々は、時に挫折し、諦めかけることもありながら、次第に気持ちをひとつにしていきます。そんな中、ミライ

にも心が芽生え始めます。そのあたりから、きっとやってくる別れが近いと感じました。

心を持ったミライが現代に存在し続けることにはさまざまな問題があるでしょう。軍事利用目的による国家権力の介入、時空間の法則や技術的制約による未来への影響、自我の肥大化による制御不能のリスクなど、いずれも深刻な課題です。しかし、それでも別れはやはりつらいものです。「帰りたい!」と悲痛に叫ぶミライの姿には胸を打たれました。

劇団年輪は今年、創立50周年という大きな節目を迎えました。長い年月をかけて一步一步積み重ねてこられた歩みは、その名のとおり年輪のように深く美しく刻まれているように感じられます。地域に根ざし、多くの人々と共に舞台を作り続けてきたその姿勢は、今回の記念公演にも色濃く表れておりました。50周年の重みを感じさせながらも、決して過去にとらわれることなく、未来へのまなざしを感じさせる温かくて力強い舞台でした。この半世紀の歩みに心からの敬意と祝福をお贈りいたします。

文：オッスたかのり(劇団かに座)



After School Theatre

■はじめに：ご挨拶と事業紹介

神奈川県演劇連盟加盟団体、ドリル饅頭の中西広和と申します。この度は神奈川県演劇連盟の新しい事業として始めました『After School Theatre（以下、ASTと呼称）』についてのご紹介をさせていただきます。



■ASTとは？：演劇体験の新しいかたち

まず、ASTとはなんぞや、と思われる方が大半だと思います。物すご〜く、広く言いますと・・・【参加型の演劇体験】です！もっと踏み込むと「演劇体験を通し、世代や性別などを越えたコミュニケーションスキルの確認」という部分もASTでは体験出来ます。演劇初心者、ベテラン、学生さん、社会人、シニア、とにかく老若男女問わず、どなたでも演劇体験に参加出来る事を目指してスタートいたしました。

■自由な参加スタイル：誰でも、いつでも

神奈川県演劇連盟には実に様々な演劇団体が加盟しております。その各団体がそれぞれの個性を生かし、参加者が好きな時に好きなだけ演劇体験に参加できる。それがASTです！

一回のみの参加が出来るのもASTの魅力です。例えば、空いた時間、興味のあるカリキュラム、ご自身の好きな団体、参加者が参加したい時に自由に参加枠を選べるのはASTの強みですし、最大の魅力です。



■スタートと展開：月ごとのプログラム

実はこのASTという試みは今年の4月からスタートしたばかりの試みです。カリキュラムを組み立てる団体もそれぞれに試行錯誤しながら、なるべく参加者に興味を持ってもらえるよう努めております。

4月は「theater 045 syndicate」主宰の中山朋文さん。5月は戸塚を中心に活動している老舗劇団「劇団年輪」の作・演出を手掛けている宮田信宏さん。6月は私「ドリル饅頭」。7月・8月は「ケル・ペッパー」の坪井俊樹さん。

今後もまだまだ色んな加盟団体がそれぞれの強みを生かし、皆様への演劇体験をASTで展開して参ります。



■今後の展望：演技以外の分野へも拡張

これまでは主に『演技』についての演劇体験カリキュラムが多かったのですが、今後はもっと枠を広げ、脚本だったり、演出だったり、音響や照明、舞台美術など、舞台に携わる「専門スタッフ」のワークショップなども展開出来たらと考えております。

■成長と期待：参加者の増加と未来

4月から始まったばかりのASTは回を重ねるごとに参加者も少しずつ増え、今後はとても楽しみです。引き続き、皆様が体験してみたい『ASTのカリキュラム』が発見、発掘、体験できるよう、神奈川県演劇連盟の加盟団体みんなでASTを盛り上げていければと思っております。



■目標と意気込み：成果発表会への夢

カリキュラムに参加した人達で成果発表会が出来れば・・・と密かな目標も持っております。

その為には魅力的なカリキュラムをどんどん提供し、沢山の参加者に参加してもらえるASTにしなければなりません。まだまだ私達の試行錯誤は続きます！

■最後に：参加への一歩を応援

まずは参加してみませんか？！！

とは言え、なかなかはじめの一歩ってのが踏み出せないですね。勇気が要りますよね。

大丈夫です！ASTはとっても柔らかくて暖かみのある、まっすぐな演劇体験が出来ます！

皆様のご参加、心からお待ち申し上げております！

文：中西広和（ドリル饅頭）





主宰、演出：須藤旭

■団体概要

「虚空環幻想レーゲンハイト」は、主宰・須藤旭によって2024年1月に発足した演劇団体です。過去には別の団体で活動していましたが、新型コロナウイルスの影響により2020年に解散。演劇活動から完全に離れようとしていた時期もありました。しかし、創作への情熱は消えることなく、演劇に対する社会の見方の変化や、周囲の活動再開の動きに刺激を受け、再び立ち上がる決意を固めました。

「どんな過程を経ても最後には笑顔で、明日への活力になるモノ」をモットーに、エンターテインメント性あふれる舞台作品を創作しています。

■団体名の由来

団体名「虚空環幻想レーゲンハイト」は以下の要素から構成されています。

・Gelegenheit（ゲレーゲンハイト）：

ドイツ語で「機会・チャンス・きっかけ」を意味する言葉。ここから語感を活かし「レーゲンハイト」と名付けました。

・虚空：何も無い空間＝舞台上の空間。

・幻想：ファンタジー、すなわち演劇そのもの。

・環：虚空と幻想を巡り繋ぐ「環（わ）」の意。

これらの要素を繋ぎ、「虚空環幻想レーゲンハイト（こくうかんげんそうレーゲンハイト）」という名を冠しました。解りにくいですね。



2024年3月 演劇博覧会にて 旗揚げ公演「天使の降り立ったこの街で」

■目指す劇団像

現在は主宰一人による小さな団体ですが、今後は協力者を増やし、最低でも「片手で数えられる人数」からなる団体へと成長させていきたいと考えています。

最終的には、神奈川エリアでアクション・エンターテインメント舞台を牽引できる存在を目指したいです。

■作品づくりの特色

当団体の作品は、以下のようなエンタメ性に重きを置いています。

殺陣、アクション、ダンス。

いわゆる2.5次元舞台が都内では一般化していますが、神奈川ではまだこのジャンルに特化した団体は少ないと感じています。そのため、**神奈川の若い世代に向けて、「大きな劇場でなくてもできる表現の可能性」**を伝え、エンターテインメント舞台の裾野を広げていきたいと考えています。



2024年3月 演劇博覧会にて 旗揚げ公演「天使の降り立ったこの街で」

■今後の公演予定

マグカルシアター 虚空環幻想レーゲンハイト vol.2

『Fiaba Fantasia ～イカれた童話のはじまり～』

日程：2026年3月19日(木)～22日(日)

会場：神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

海外の童話を題材にした、殺陣・アクション・ダンスを盛り込んだエンタメ性の高い舞台を予定しています。不思議の国のアリスや赤ずきんなど、誰もが知る童話をモチーフに、少し“イカれた”世界観でお届けします。



2024年3月 演劇博覧会にて 旗揚げ公演「天使の降り立ったこの街で」

■将来の目標

前団体では叶わなかった夢——

「KAAT 神奈川芸術劇場での公演」を、今団体で実現することが大きな目標です。

■若手育成・教育的取り組み

主宰が所属する別団体では、殺陣・アクションのワークショップを毎月隔週で開催。講師を交代制で行い、初心者から経験者まで学べる場を提供しています。

興味のある方は、ぜひQRコードより詳細をご確認ください。



■広報・SNS活動

公式X（旧Twitter）アカウントにて、公演情報や稽古風景などを随時発信していく予定です。ぜひフォローして、最新情報をチェックしてください！



■劇団の紹介

劇団名：劇団まきじゃく

代表者：川上創平

コロナ禍の2020年、法政大学多摩演劇研究会（以下、たまげき）のメンバーの卒業公演を実現させるためにオンライン配信公演を行ったのが、劇団まきじゃくのがスタートです。

旗揚げからもコンスタントに公演を継続し、第三回公演（2022年1月）では初の有観客公演を行い、第四回公演（2023年3月）以降は、たまげきの出身者以外も中核メンバーとして公演に参加するなど、劇団活動の規模を徐々に拡大しています。

劇団まきじゃくは、主宰の川上創平がやりたいこと、おもしろいと思うことを、まわりの人を巻き込みながら、演劇としてかたちにしていく劇団です。そのため、学生演劇時代からの見知ったメンバーに加え、普段演劇をしていない人たちが座組みとしてかわかることも多く、柔軟で実験的な試みが出来る劇団です。



■作品づくりについて

劇団まきじゃくは、公演ごとに形態や主要メンバーが大きく変わっているので、作品づくりの進め方として、テーマの共有や安心して公演に取り組める環境をつくることを意識しています。

テーマの共有では、作劇の段階から脚本家、演出家とどんな公演にしたいかをディスカッションすることで、物語や演出の方針が一貫して作品づくりが進むようにしています。

環境作りとしては、劇団主宰の川上が稽古場に頻繁に顔を出すことで、劇団まきじゃくの常連のメンバーとはじめてのメンバーがうまく馴染んで、安心して稽古を進められるような雰囲気づくりを心掛けています。

また、会社員など本業の傍ら公演に参加するメンバーが多いので、余裕を持ったスケジュールを組み進行するなど、座組の人たちができるだけ無理なく、安心安全にかかわれるような工夫をしています。

■将来の目標

劇団まきじゃくは、「初めて演劇にふれる人も楽しめる」という目標を掲げて活動しています。これは、観客として作品を観に来てくださる人も、座組として関わってくれる人も、劇団まきじゃくの公演をきっかけに「演劇っておもしろい！」「もっと知りたい！」と思ってもらいたい、演劇に興味がある人を増やしていきたいという、劇団主宰の思いが反映されたものです。

公演回数を重ねる中で、関わってくれる人の幅や、公演規模も大きくなってきているので、将来的には、公演を取り巻くさまざまなもの（例えば、劇場だったり、演劇公演を作る仕組み自体だったり）をよりたくさんの人が、演劇に関わりやすく親しめるようにすることができればと考えています。

■今後の公演予定

現在、演劇に興味がある人が、学校の文化祭のように気軽に参加できる『文化祭公演』や、劇団まきじゃくをきっかけに出会った人たちがよりチャレンジングなことをしていく『劇団内ユニット』の活動などを予定しています。

ひとえに演劇に興味があるといっても、さまざまな動機やモチベーションがあると考えていて、劇団まきじゃくというつながりを利用してたくさんの人が幅広く、演劇に取り組めるよう、活動を展開していきます。



■地元演劇連盟や地域との関係

法政大学多摩キャンパスの演劇サークルが発祥のため、地域としては西東京がルーツの劇団ではありますが、劇団内に神奈川県出身者が多くおり、過去、神奈川演劇連盟の公演に参加したことがあるメンバーもいました。連盟が活動の中心としている劇場も観客として何度も足を運んだことがある、昔から憧れと親しみのある場所です。

■地元演劇連盟や地域に期待する役割と今後の関わり

演劇を継続していくうえで、地域の劇場のバックアップやコミュニティの繋がりがあことは、安心材料として非常に大きいと思っています。神奈川出身のメンバーからすると、子どもの頃から育ち生活している地域と、自身の演劇活動を結び付けられることで、今後も演劇を続けていけるイメージが持ちやすくなるのではないかと想像しています。

地域の演劇活動に参加していくことで、関わる人の輪を広げていき、劇団まきじゃくとしても安心して演劇活動が続けられる、文字どおり地盤のようなものが持てると嬉しいです。



資料室だより

演劇資料室からオススメの一冊

「勘九郎とはずがたり」

(中村勘九郎(十八世・中村勘三郎)著/集英社文庫)

いつものように演劇資料室で何か面白い本がないかとぶらついていると、＜歌舞伎・能・伝統芸能＞の区分棚が目に入った。歌舞伎は折しも映画「国宝」が若い世代も含めて大人気である。結果的に歌舞伎座に足を向ける若者が増えているようだ。たまには目先を変えて伝統芸能の中からお勧めを探すのも面白いかもしれないと思った。

そこで目に留まったのが本書。奥付に構成：小田豊二とある。「聞き書き」の第一人者である。実は筆者は、かつて小田先生の講義を受講し、以来「聞き書き」に取り組んでいることもあって本書を手にした。なので、本書も中村勘九郎のちょっとべらんめいな気取りのない語り口調で綴られていて、その軽みが楽しい。

一つ例を挙げてみよう。勘九郎は、勘三郎の名跡を後に継ぐことになるのだが、その先代、つまり父親は息子から見ても名人であり、天才だったという。しかもへそ曲がり。なので、舞台の上では勝手気ままに振舞っていたようだ。それが嫌味でもなく、誰もが納得していたというのだから、すごい。しかし相手役として絡む役者にとってはやりにくいことこの上なかったそうだ。例えば主役が舞台からはける場面、相手役がそれを止めようと袖をつかんで「お待ちください！」と叫ぶ。こういう時って、主役、つまり引き留められる方は、袖をぐうっと回して相手役が掴みやすくすることがある。我々からすればそれが芝居で息を合わせる、ということだろうと思うのだが、こういう芝居を先代は嫌ったそうだ。で、どうするか？ズンズンはけちゃう。止める方の役者はあせるよねえ。止まってくれないもんだから、芝居が変わっちゃう。これは決め事を勝手に変えてしまうわけだから今なら大変。「でも、本気で芝居をするっていうのはそういうことかもしれま

せん」と勘九郎は語る。筆者も役者の端くれとして、こんな風に本気で丁々発止とやりあう、そういう芝居を一度くらいは、仕込んでみたいなあと思う。

そういえば、我々の日常生活の中で何気なく口にする言葉にも歌舞伎がルーツとなっているものが多い。例えば歌舞伎の一連の作品の中で特に人気の演目を「十八番」といい、文字通り十八本の演目が挙げられるのだが、同じ意味で「おはこ」とも言う。その語源をご存じだろうか？調べてみてな一ほどと納得した。これは読者諸兄もご自身で調べてみることをお勧めする。

さて、天才勘三郎のエピソードをもう一つ。人気演目の一つに長谷川伸の名作「一本刀土俵入り」がある。主人公の駒形茂兵衛を演じた時のこと。博打のいかさま師を追ってきたやくざが旅人姿の茂兵衛を間違えて、後ろから襲い掛かる場面。茂兵衛の編笠に切りかかったが間違いに気づき「あ、人違いだ！」と言葉を発する。それを受けて茂兵衛、何と言ったか？「人違いってのはなんだ！」その迫力がすごかった。芝居を超えていたという。どうもその芝居では、やくざを演ずる役者さんの芝居が気に入らずイライラしていたらしい。それでやくざ役の役者さん、びびっちゃったらしく「おひけえなすって、、」で勘三郎の茂兵衛が「バカヤロー、気をつけるこの馬鹿が！」って真に迫った。ここまで多分アドリブ。だから台本にはない。それでヤクザ役さん「手前、生国と発しますところ、葛飾柴又ですっ！」って、もう訳が分からなくなってる。さらに「寂しい野郎でござんす」なんて言うもんだから、茂兵衛のなりをした勘三郎が「そうかい、てめえはそんなに寂しいのかい」って、観客には大うけだったそうだ。こんな面白い話がほかにも随所にちりばめられている。こんな風に自由に、闊達に芝居できたらいいなあと思いませんか？皆さんはどうです？

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）

土曜・日曜・祝日（月曜以外） 10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休室日】

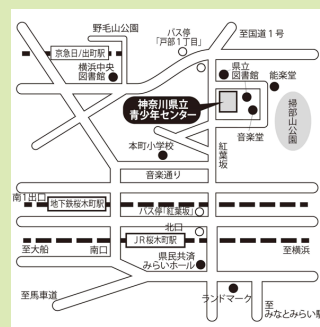
月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。

ホームページをご確認の上、お越しく下さい。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』 ■ケル・ペッパー ■京浜協同劇団 ■劇団河童座 ■劇団唐ゼミ☆ ■劇団コピュラ
■劇団年輪 ■劇団820製作所 ■劇団まきじゃく ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゅうくりあ ■虚空環幻想レーゲンハイト
■Theater Company 夜明け ■theater 045 syndicate ■ドリル饅頭 ■プラスチックな月 ■まりこ☆みゅーじあむ
■MPiNK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川) ■横浜小劇場(横浜演劇研究所附属) ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 95号

【発行】一般社団法人 神奈川県演劇連盟（2025年9月30日）

【編集】オッスたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、
中山朋文（theater 045 syndicate）、宮田信宏（劇団年輪）、こんのかつゆき（劇団コピュラ）

【ホームページ】<https://kenenren.or.jp/>

